四国観光　第五弾

愛媛県編①

Please join us !

大阪おおさかの街 OSAKA

for the city of Osaka

愛媛県大阪事務所は地下鉄四つ橋線肥後橋駅上がってすぐの所にあります。業務は、県内の観光、Ｕターン就職、「愛媛産には、愛がある」をキャッチフレーズとした”「愛」あるブランド産品”の情報や、じゃこてん、乾物、砥部焼、タオル製品、真珠、お酒などの展示販売のほか、愛媛への工業立地の相談も行っています。観光・物産イベントなども随時開催し、愛媛県の魅力をタイムリーに紹介しています。

愛媛県のあらまし

愛媛県は、四国の北西部に位置し、北は瀬戸内海（燧灘（ひうちなだ）と伊予灘）、西は宇和海に面しています。山口県と広島県に向かい合う芸予諸島は２百余の島々があり、海岸線は１６３３kmにも及びます。気候は全体として温暖で、年間を通じて雨が少なく晴天の多い瀬戸内式気候、宇和島市方面の南西部は、夏に雨の多い太平洋岸気候となっています。西部の佐田岬半島は、全長40km、最大幅６．４km、最小幅０．８kmの日本一細長い半島で、通年季節風が強く、その風を利用して11基の風車で風力発電を行っています。海上交通の盛んな愛媛県には51の港があり、関西、瀬戸内、九州をはじめ、外国航路も開かれているほか、瀬戸内しまなみ海道などの高速道路網の整備で、本州との陸上交通が結ばれ、産業や文化の交流が活発になってます。

愛媛県の産業

愛媛県では、みかんや伊予柑などの柑橘類の栽培が盛んで、「かんきつ王国」と呼ばれています。みかんの栽培は、江戸時代末期に宇和島市の加賀山平次郎が、観賞用としてみかんの苗木を植えたことが始まりとされています。明治時代になって食用として栽培されるようになりました。現在の出荷数は全国２位ですが、農協直営の肥料工場で、各産地に合う肥料を施して安全でおいしいみかんが生産されています。たとえば、菜種かす、魚かす、貝の殻などを配合した自然肥料など。みかん栽培地の宇和島沿岸のミネラルを豊富に含んだ土、日照条件に恵まれていることもおいしさの理由です。

みかんＰＲの面白い演出に、「ポンジュース蛇口の日」というものがあります。毎月第三日曜の10時から14時の間は、松山空港に設置された試飲用の蛇口をひねれば、みかんジュースが出てくるというもの。もちろん、無料です。

リアス式海岸の続く宇和島市や愛南町などの宇和海沿岸では、真鯛の養殖が全国１位です。当地では当初、天然真鯛の稚魚から飼育していて、出荷までに３～４年かかっていました。昭和40年半ばから人工種苗の進歩で、２年ほどで出荷できるようになりました。現在、養殖真鯛の生産は天然真鯛の漁獲量の５倍にもなっています。品質向上ために、養魚の間は黒いシー

日本一のタオル製造の地

トで日焼けを防いだり、飼料にハーブを配合し魚臭さを消すなどの工夫がされているほか、鮮度の維持のため、いち早く締める真鯛専用の「自動締め機」を全国で初めて導入し、最高品質の県産真鯛「愛鯛」として知られています。

愛媛県で工業の盛んな地域は瀬戸内海沿岸です。四国中央市から新居浜（にいはま）市、西条市、今治市、松山市にかけては瀬戸内工業地帯の一部となっています。四国中央市は製紙工業、新居浜市は金属・石油化学工業、西条市は半導体製造、造船・鉄工業、今治市は造船業、タオル製造、松山市は化学繊維の製造が行われています。愛媛県の東部で工業が発達したのは新居浜市に別子（べっし）銅山があったからです。別子銅山は、秋田県の小坂、栃木県の足尾とならぶ日本三大銅山の一つで、１６９１年から１９７３年までの２８３年間で約70万トンの銅を産出し、この銅をもとに多くの工場が造られ、日本の産業が発展する礎となりました。坑道の長さは７００kmにもおよび、海面下１０２０ｍまで掘り進んだそうです。その歴史は別子銅山記念館にみることができます。

今治市の繊維工業は、江戸時代中期に始まった白木綿の生産がもとになっています。明治時代に白木綿の生産が衰退し、代わって登場した綿ネルをタオル製造に変えてから全国一のタオル製造の地となりました。しかし、昨今は中国などの安価なタオル製品におされ、日本のタオル工業組合は国に繊維セーフガード発令を要請しています。このような背景の中、今治市では、吸水性や耐光性に優れた高級タオルの製造に方向転換しています。ニューヨークのホームテキスタイルショーでグランプリを連続受賞した経緯から、経済産業省の「ＪＡＰＡＮブランド育成事業」に指定され、今治オリジナルタオル「ふわりシリーズ」で世界的に活動しています。

国指定の「伝統的工芸品」には、砥部（とべ）焼と大洲（おおず）和紙があります。砥部焼は、大洲藩主が藩の財政立て直しに、刃物や石材を作る時に出来る砥石くずを使って磁器を作るよう命じたのが始まりです。白地の器に、呉須（ごす）という絵具を塗って焼くと青色に染められ、丈夫なのが特徴です。大洲和紙は、書道用の半紙などに使われる和紙で、内子町を中心に作られています。江戸時代に始まり、大洲藩主が保護して発展しました。最初はコウゾの繊維を原料にしていましたが、明治中期から原料をミツマタに代えてから、筆のすべりがよく、墨がにじまない質の良い半紙となりました。四国中央市では、和紙を堅くよった元結（もとゆい）という紐を細工して松竹梅などを形作る縁起物の水引細工が知られています。

伊予の水引は、古くから先人たちが培ってきた「結ぶ、編む、巻く」という技法によって、形が作られてゆきます。

砥部焼きは、やや厚手の白磁に薄い藍色の手書きの図案が特徴で別名喧嘩器ともよばれています。

今回は、愛媛の物産について紹介しました。次回は観光面を取り上げます。

愛媛県大阪事務所
大阪市西区江戸堀１の９の１肥後橋センタービル
０６・６４４１・２８２９

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。
（株）ファッションビジネス・御堂筋新聞